

# 子どもの主体性を育む音楽表現活動の取り組みに関する一考察

— 幼小接続を見据えた実践内容に着目して —

村松 麻衣

## A Discussion on Activities of Music that Nurture a Child's Independence — Focusing on Practice Contents in Anticipation of Cooperation Between Nursery School and Primary School —

Mai MURAMATSU

### 抄 録

本論は、音楽表現活動の実践内容をもとに、指導者の言葉がけ、子どもの反応や子どもの気づき、活動のなかで子どもたちが習得する音楽基礎知識について分析し、子どもの主体性を育む音楽表現の指導法について考察したものである。音楽表現活動において、子どもは音を聴くことに集中し、音楽の音程感やリズムを感じながら身体表現を行い、オノマトペを発する姿が見られた。指導者が子ども一人ひとりをよく観察し、励まし声掛けをすることで、子どもが主体的に活動を取り組む姿が見受けられた。

乳幼児の音楽表現活動において、指導者が子ども理解を深めることとともに、音楽の基礎知識や技能を継続的に習得することが必要不可欠であることが明らかとなった。保育者養成において、学生の音楽表現技術向上を目的とした実技指導の実践だけでなく、習得した音楽表現技術と保育に関する知識・技術、子どもの日常の遊びとを関連付けた『音遊び』の検討と実践を行い、子どもと音楽表現活動との関わりについてさらに深く教授する必要がある。

キーワード：幼児教育、音楽表現、指導法、音程、リズム

### 1. はじめに

平成30年に施行された新しい幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、幼児教育を行う施設として、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園がそれぞれ同等の教育を行うことを基本とするため、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿<sup>1)</sup>と、3つの柱である資質・能力<sup>2)</sup>を育てる必要性が記された。三法令の改訂・改定では、子どもの身近な環境にある出会いから展開される遊びや経験を通して、楽しみながら試行錯誤し、見方や考え方を身に着け、多様な感情体験をすることで、子どもの心身の発達を促し、豊かな人間性を育むことへつながることから、乳幼児期の保育教育の重要性が再確認された。

領域「表現」において、子どもたちが心動かす出来事などに触れ、感じたことを表現したり、友達同士で表現を共有したりする活動を通して、表現することの喜びを味わい、意欲をもてる

ような遊びを展開すること、音楽表現活動では生活のなかで音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりするなど楽しさを味わうことができる活動を展開することが保育・教育の現場では求められている。そのため、乳幼児の保育・教育における音楽表現活動において、ピアノ演奏技術や弾き歌いの技能習得だけでは不十分である。

著者は保育者養成校で音楽表現指導を担当し、音楽基礎知識やピアノ演奏、幼稚園や保育園での生活で扱われる子どもの歌や童謡、唱歌等の楽曲を中心とした弾き歌いの指導を行っている。そのなかで、音楽関連技術の習得だけではなく、保育者養成課程の学生自身が音遊びや音楽表現活動を体感する機会を多く設けることが必要なのではないかと強く感じている。子どもの日常の遊びを想定した音楽表現活動の実践法や音遊びを考え実践するためには、子どもの心身の発達や成長に関する知識と音楽関連の知識や技術を応用し、子どもの姿を想定して計画を立案する必要がある。

本論では、著者が2019年3月からピアノ伴奏と指導補助を担当しているリトミック教室での実践内容をもとに、指導者の言葉がけ、子どもの反応や子どもの気づき、活動のなかで子どもたちが習得する音楽基礎知識について分析する。分析した内容から子どもの感性を育む主体的な音楽表現活動や音遊びの指導法について考察する。

## 2. 実践方法

本著で分析する音楽表現活動の実践は、著者が2019年3月からピアノ伴奏と指導補助を担当しているリトミック教室の2～5歳児クラスで行った。担当しているクラスの子どもは、これまで音楽関連の習い事の実験はなく、保護者の付き添いで毎週教室に通っている。音楽表現活動中は音に合わせて身体を大きく動かしたり、走ったり、飛んだり、跳ねたりするため、必ず靴下を脱いで活動するよう子どもたちに指導している。また、活動の妨げとなる電子機器は音が鳴らないように設定をすること、子どもが泣き出すと周りの子どもの集中力や音を聴く感覚が鈍くなるため、泣き出したら廊下で泣き止むまで待機することを教室のルールとしている。子どもの意思を尊重し、子どもが保護者に寄り添いたいときは、保護者も一緒に音楽表現活動に参加するように促している。実践は以下のように行った。

場所：イク・リトミックピアノ教室<sup>3)</sup>

- ・期間：2019年8月7日、8月21日、8月28日、9月4日（実施時間はいずれも約40分程度）
- ・指導者：沼田郁子<sup>4)</sup>
- ・ピアノ伴奏者：著者
- ・対象者：2歳～5歳 男児3名、女児3名

主な活動内容は表1の通りである。本著における活動内容の分析は、③音階唱『エレベーターにのりましょう』と④『ジャングル探検』の活動内容を抽出し、各回の記録音源をもとに活動内容を振り返り、指導者の声掛けの内容や子どもの反応と活動の様子、子どもの動きに合わせて伴奏した音楽について分析と考察を進めた。なお、教室の配置図は図1の通りである。

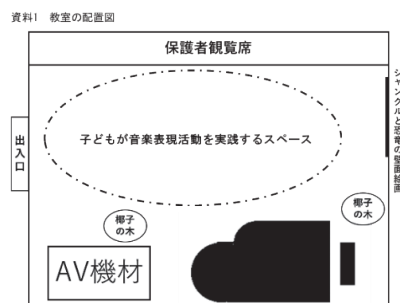


図1 教室の配置図①

表1 実践内容と子どもの動き（2019年8月7日～9月4日）

活動	時間	内容と子どもの様子
①『Hello song』	3分程度	子どもたちと指導者、伴奏者が手をつなぎ輪になって『Hello song』を歌唱し、子どもたち一人ひとりの名前を呼びかけ、子どもたち全員が一人ずつハローと返事をする。開講初日から毎週欠かさず実践しており、3月～5月は自分の名前を呼ばれてもなかなか返事ができず、恥ずかしそうにしている姿が目立ったが、7月頃から積極的に返事ができるようになってきている。
②歌唱『ドレミの歌』	5分程度	11月に開催される発表会の全体歌唱のための歌唱と簡単な踊りの練習。7月31日から始めた活動で、子どもたちはドレミの歌を元氣いっぱい歌いながら、踊りを覚えている様子である。
③音階唱『エレベーターにのりましょう』	8分程度	5月から毎週実践している活動。フラフープの中に子どもたちが一人ずつ入り、エレベーターに乗った気分で、音階に合わせて歌いながらフラフープと身体を上下させ音階感を養う活動。歌を歌った後、エレベーターが動き出し、音に合わせて走ったり突然穴に落ちて止まったり、音に合わせて身体を動かす活動を取り入れている。
④『ジャングル探検』	20分程度	ジャングル探検を題材に、以前教室の発表会で使用した壁面の絵を見ながら、指導者が導入で素話を展開し、ジャングル探検に出かける準備をする。造花の葉や花で装飾した被り物を身に付け、指導者が作曲したジャングル探検のうたを歌いながら、ジャングル探検へと出掛ける。ジャングル探検の途中でワニ達に遭遇し、音価の違いに合ったワニを水鉄砲で退治する。その後、探検の途中でヤンの木にぶら下がる恐竜の卵を発見し、その卵をコゼック作曲ガヴオットのフレーズに合わせて、落とさないように順番に回し、椰子の木に返す活動を展開する。ジャングルでの活動を振り返り、再度ジャングルのうたを歌いながら、街へ戻っていく。
⑤『アイスクリームのうた』	3分程度	7月から実践している活動で、ハンカチをアイスクリームに見立てて、身体で拍子を取りながら歌う活動。ハンカチを小さく折りたたみ、ハンカチを小さくする度に歌の速度を速め、テンポの違いを楽しむ活動である。
⑥『good-by song』	1分程度	『Hello song』と同じ旋律に合わせて、子どもと指導者、伴奏者が手をつなぎ輪になって、皆でさようならを歌う締めくくりの活動。

### 3. 実践内容の分析と考察

#### (1) 実践分析Ⅰ：音階唱『エレベーターにのりましょう』

音階唱『エレベーターにのりましょう』は、活動1【音階唱】、活動2【音楽に合わせて走る】、活動3【走っている途中で大きな音がしたら止まる】、活動4【音楽に合わせて走るのをやめる】<sup>5)</sup>、この4つの活動を組み合わせたものである。担当クラスでは、活動1から活動4を2～3回繰り返し、音楽に合わせて歌を歌ったり、身体を動かしたりする。この活動を2019年5月から毎週継続的に実践している。

指導者の「さあ、今日もみんなエレベーターをやりましょう！」という呼びかけを合図に、指導者と保護者が子どもたち一人ひとりにフラフープを配布した。指導者と子どもたちはエレベーターに見立てた自分のフラフープの中に入り、子どもたちの準備が整いはじめると指導者は「準備はできましたか？エレベーターのうたを歌いましょう。」という声掛けをした。指

#### エレベーターのうた

図2 『エレベーターのうた』の伴奏譜

導者の合図を受け、ピアノ伴奏者が図2『エレベーターのうた』の演奏を始め、ピアノの前奏に続いて、子どもたちと指導者は活動1を行った。

活動1が終わると、指導者は「あれあれー？エレベーターが動き出しますよー！」と子どもたちへ声を掛け、伴奏者は自身が考案した図3-1『エレベーターに乗って走る音楽』の演奏を開始し、子どもたちはフラフープの中に入ったまま教室を走り回る。図1の通り、子どもたちが十分に走ることができるスペースが確保されているが、指導者は子どもたちが安全に活動できるように、子ども一人ひとりの様子を確認しながら適切な声掛けを行い、音楽に乗って走っている子どもたちを励ましながら活動を進めた。

子どもたちが一定間

隔を保って走ることができるようになると、指導者は伴奏者へアイコンタクトを送り、伴奏者が図3-2『エレベーターが落っこちる音』を低音の重音で鳴らし、子どもたちはこの音を聴き、走ることをやめて各々床にしゃがむ。再び図3-1『エレベーターに乗って走る音楽』の冒頭部分が聴こえると、子どもたちは徐々に走り出し、次第に速度を速めて走った。

活動2と活動3を2～3回繰り返し、指導者の合図を受けて、伴奏者が図3-1『エレベーターに乗って走っている音楽』の第二括弧部分を演奏し、徐々に速度を落としながら音楽を終息させた。子どもたちは音楽の変化を察知し音に合わせて活動4を行い、フラフープの中に入りその場に座る。伴奏者は子どもたちが動きを止まったことを確認すると、再び『エレベーターのうた』を演奏しはじめる。その後、前奏部分で指導者がエレベーターの歌を歌うように子

### エレベーターに乗って走る音楽

図3-1 『エレベーターに乗って走る音楽』伴奏譜

### エレベーターが落っこちる音

図3-2 『エレベーターが落っこちる音』伴奏譜

もたちへ呼びかけ、子どもたちはピアノの音に合わせて活動1行う。実践では上記一連の流れを2～3回繰り返した(図4-1、図4-2)。



図4-1 『エレベーターに乗りましょう』



図4-2 エレベーターに乗って走っている様子

## (2) 実践考察Ⅰ：音階唱『エレベーターにのりましょう』

活動1【音階唱】では、エレベーターに見立てたフラフープを1音ずつ上げたり下げたりさせ、音階に合わせて全身を使う音階唱の活動を行った。ピアノ演奏に合わせて音階唱を行うことで、ピアノの音を聴きながら自分の声をピアノの音程に合わせて歌おうとしている。担当クラスでは2019年5月から毎週実践しており、子どもたちは回数を重ねる毎に正しい音程を理解しながら自分の歌声をその音程に合わせて歌おうとする姿が見られる。活動を通して、子どもたちは音階を歌いながら聴音する力を育み、絶対音感獲得の基礎を養っていると言えよう。

活動2～活動4では、子どもたちが音楽を聴きながら身体を動かし音楽に合わせた動きをすることで、集中力と即時反応力が養われている。音に合わせて走ったり止まったりする活動はクラスが開講された当初から継続的に実践しているが、音階唱『エレベーターにのりましょう』と合わせて活動を取り入れることで、子どもたちはそれぞれの活動を楽しみながら継続して実践できている。

指導者は実践中の子ども一人ひとりの様子をよく観察し、安全確保に務めるだけでなく、子ども一人ひとりに声を掛け、子どもを褒めたり励ましたりすることで、子どもが主体的に音楽表現活動を行えるような指導を実践している。また、伴奏者は子どもの姿を観察しながら、子どもの動きや声の大きさに合った速度と音量でピアノ演奏することを心掛けており、それぞれの活動に合った音楽を奏でられるよう、音の高さや音色を区別し演奏するよう努めた。指導者が子どもたちに指示をしている最中にピアノ演奏を止めることはあるが、すべての活動のきっかけが音楽主体となるように指導者は声掛けをし、伴奏者は一つの活動の終息と次の活動の開始が自然につながるよう即興的要素を織り込み、活動それぞれに合った音楽を展開できるよう意識した。

音楽基礎知識習得のための基礎作りの一環として音階唱『エレベーターにのりましょう』を行っているが、子どもが聴こえてくる音を感じ、その音を身体で表現できる力を養うことが、音感を養うことにつながるといえよう。子どもたちが一つ一つの活動を楽しんでいると感じ主体的に活動できるよう、指導者と伴奏者が連携を取り、意欲を掻き立てる指導を心掛けることが大切である。



### (3) 実践分析Ⅱ：『ジャングル探検』

『ジャングル探検』の活動では、音楽に合わせて歌う活動、音を聴き音価の違いを感じ取り身体表現する活動、音楽に合わせてフレーズを感じる活動を順番に実践した。本論ではワニが描かれた衝立を使って実践した、音楽を聴きリズムと音の長さの違いを感じて表現する活動を中心に分析する。なお、音楽に合わせて歌う活動ではオーケストラ音源を使用し、音楽を聴き音価の違いを感じ取り身体表現する活動、音楽に合わせてフレーズを感じる活動はピアノ伴奏で実践した。

音階唱『エレベーターにのりましょう』が終わると子どもたちは所定の場所へフラフープを片付け、図1のように吊るされた壁面の前に座った。掲示された壁面は、以前教室主催のコンサートで子どもたちの発表のために当時の保護者が製作した壁面で、植物や恐竜を絵の具やおりがみ等を使って描写している(図5)。

指導者は壁面を見ながら、ジャングルには様々な草木や野生動物が住んでいると説明し、子どもたちと絵に描かれているものやジャングル探検に必要な持ち物、持っていきたいものについて子どもたちの話に耳を傾け、活動の導入を行った。そして、「これからジャングル探検に出かけよう」と指導者が声を掛け、子どもたちは草木の装飾がついた被り物を装着つけ、ジャングルに出かける準備をする。準備が整うと、指導者がコンサート用に作曲した『ジャングル探検の歌』のオーケストラ音源をAV機材で流し、子どもたちは指導者、伴奏者とともに前奏に合わせて行進を始め、前奏に続けて歌唱した。



図5 ジャングルの壁面



図6 ジャングル探検の歌

歌唱を終えると、指導者は「ジャングルにきましたねー。あれあれ? あそこに1匹のワニがいるよー。」と言葉を掛け、段ボールに音符とワニの絵が記された衝立を所定の場所にワニ1を配置する(図7)。ワニの衝立は全部で三種類あり、男の子のワニと四分音符、女の子のワニと八分音符、太ったワニと二分音符が描かれている。四分音符が記された衝立が設置されると、指導者が子どもたちに「さあ、このワニを水鉄砲でやっつけましょう。」と声をかけ、四分音符の音楽に合わせたリズム活動を展開する。子どもたちは図8のピアノ伴奏のリズムに

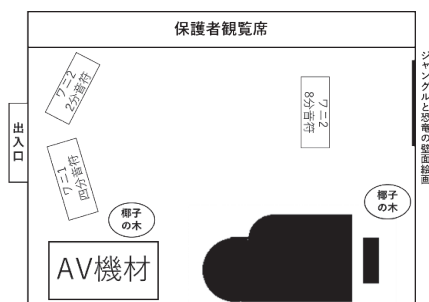


図7 教室の配置図②

合わせて「シュ、シュ、シュ、シュ」と言葉を発しながら、鉄砲を身構えた格好で指導者とワニ退治をはじめた。子どもたちがリズムに合った活動ができるようになると、指導者が「ワニさん、弱ってしまいましたね。今度はあそこに違うワニさんが出てきましたよ。」と言葉をかけ、保護者が所定の場所にワニ2を配置した。子どもたちは二分音符で展開されるピアノ伴奏に合わ

ワニ退治の伴奏譜  
【ワニ1 四分音符】



ワニ退治の伴奏譜  
【ワニ2 八分音符】



ワニ退治の伴奏譜  
【ワニ3 二分音符】



図8 ワニ退治の伴奏譜

せて「シュー、シュー、シュー、シュー」と発しながらワニ退治を行った。ワニ2の退治が終わると指導者が「あそこにまた違うワニさんがいますね！みんなでやっつけましょう！」と子どもたちに呼びかけ、八分音符のリズムに合わせて、「シュシュ、シュシュ、シュシュ、シュシュ」と発しながらワニ退治した。ワニ退治の活動は音の長さの違いを感じて身体で表現する目的があり、子どもたちは指導者とともにワニに向かって、ピアノ伴奏のリズムに合わせて大きく身体を動かしていた。伴奏者は三種類の違いに子どもたちが気づけるよう、音価の違いに留意するだけでなく、音高にも違いを出し、それぞれの個性を感じ取れるような音楽を奏でることを意識した。

三種類のワニ退治を終えると、指導者は「みんな大変です！今度はあのワニさんが復活してしまいました！」と子どもたちに呼びかけ、伴奏者は指導者が指さしたワニに合わせた音を演奏する。子どもが三種類のリズムそれぞれを感じ取り、リズムの違いを感じ取れるようになるため、3種類のワニ退治を流動的に展開した。子どもたちがリズムの違いを感じ取れるようになると、指導者は「どんなワニさんのピアノが聴こえてくるかな？ピアノの音を聴いて、当てはまるワニを退治しましょう！」と子どもたちに声をかけ、子どもが音を聴きリズムの違いを見つける活動を展開する。これらの活動を継続することで、子どもがリズムの違いを聴き分け、音楽に合わせた表現ができるようになった。そして子どもたちが活動を何度も繰り返し、リズムと音の長さの違いを聞き分け身体表現ができるようになると、「3匹のワニさんが弱ってしまい、川に戻っていきました。」と指導者は子どもたちに語り掛け、ワニ退治の活動を終えた。

ワニ退治の活動を終えると、音楽に合わせてフレーズを感じることを目的とした活動を行った。この活動ではヤシの木にぶら下がっている恐竜の卵を使い、コゼック作曲『ガボット』のピアノ演奏に合わせて、2小節ひとまとまりになっている楽曲のフレーズに合わせて、恐竜の卵を隣の子どもの手に渡す遊びを実践した(図10)。2歳から3歳の子どもを中心に活動を進めているため、フレーズを感じながら隣にいる友達に卵を渡す活動に戸惑っていたが、毎週活動を続けることで、音楽聴きながらフレーズの終わりどまりを感じ取り、隣の友達に「はい、どー

ぞ」と声をかけながら音楽に合わせた表現を実践していた。恐竜の卵の活動を終わると、再び『ジャングル探検の歌』を皆で歌い、ジャングル探検を終了した。



図9-1 8分音符の活動



図9-2 4分音符の活動



図9-3 2分音符の活動



図10 フレーズを感じる活動

#### (4) 実践考察Ⅱ：『ジャングル探検』

『ジャングル体験』のリズム活動では、音楽に合わせて身体を動かしながら言葉を発し、音楽の拍子感とリズムの違いを感じる活動を実践した。本活動の目的は、子どもたちにリズムを知識として習得させることではなく、音楽の流れのなかでリズムや音の長さの違いに気づくことである。伴奏者はリズムや音価の違いを正確に表現するため、設定テンポを変えることなく三種類のリズム伴奏を演奏するよう心掛けた。また指導者は、リズムの聴き分けの実践を円滑に進めるため、四分音符の衝立には男の子のワニ、八分音符には細い女の子のワニ、二分音符には太ったワニの衝立を用意した。リズムの違いから生じる曲想の違いを視覚から認識できるよう、施した造形表現の工夫である。子どもがリズムの違いを聴き分けて音楽に合ったリズムを自分で選択し表現する活動では、前の活動から次の活動へ移り変わる際に音楽の流れを止めず、音楽で子どもたちを誘導するように努めた。活動を通して、流れてくる音楽によく耳を傾ける姿や、音楽に合わせて身体表現をする姿、オノマトペを発する子どもの姿が見られた。

本活動を始めた当初の子どもたちは音楽を自由に捉え身体を動かしていた。しかし、指導者がワニを退治する方法を子どもたちに伝え、身体の使い方やリズムの取り方を子どもたちに提示すると、子どもたちは指導者を模倣し、音楽に合った身体表現をするようになった。活動を1か月程度継続して実施すると、子どもたちはリズムの違いを感じ取り、リズムに合った音楽



表現を実践しようとする姿が見られた。

また、楽曲に合わせてフレーズを感じ取る活動では、楽曲のフレーズの終息に合わせて子どもが順番に恐竜の卵に見立てた球体を隣の子どもへ渡し、子どもたちが音楽に耳に集中する姿だけでなく、少しずつ周りとのコミュニケーションを取りながらタイミングを計る姿も見受けられた。

担当しているクラスの子どもはこれまで音楽関連の習い事等の経験がないため、指導者は音楽だけに頼らず、子どもが楽しく音楽表現活動ができるよう様々な工夫を施していた。教室に壁面や椰子の木を設置したり、子どもたちに草木の被り物を用意したり、指導者が探検家を模した衣装を着用したりすることで、子どもがジャングルの世界に入り込み、想像性と音楽性の両方を育むことを可能にしているといえよう。

今回のリズム活動では音楽表現だけでなく、造形表現やオノマトベによる言語表現、身体表現を用いて、子どもたちがリズムの違いを感じとれるよう心掛けたが、設置した衝立にも工夫が施されていた。音楽表現活動において、活動に合った曲想の音楽を奏で、子どもに音楽表現から想像力を育み、音に集中できるようにすることが重要である。しかし音楽表現だけに頼るのではなく、子どもたちの想像性と主体性を育む活動の実践できるよう、子どもの姿を把握し子ども理解を深め、他領域と関連付けて環境構成や言葉がけに工夫を施すことも必要不可欠だといえよう。

#### 4. まとめ

本論では、子どもの音楽表現活動や子どもの様子について考察した。音程感とリズム感、子どもの想像力を育む本活動では、指導者が一人ひとりの子どもをよく観察し積極的に声掛けをすることで、子どもは楽しみながら生き生きと活動している様子が見受けられた。乳幼児の表現活動では、指導者が子どもの発達過程を理解し、子どもの主体性を育めるような環境を準備するべきである。また指導者の言葉掛けや援助においても、子どもの目線を持つことが大切である。指導者は子どもの姿や子どもの様子を見通しておおよその枠組みを設定して実践を進めるが、常に子どもたちの声に耳を傾け、子どもたちの興味や欲求に柔軟に対応することも必要だといえる。音楽表現活動では、子どもの主体的な表現を引き出せるよう、指導者と伴奏者が連携を取り子どもの様子の把握に務めることが重要であり、子どもの想像力を育む音素材の探求を進めなければいけない。活動に合致した音楽表現を具現化するためには、指導者が子ども理解を深めることとともに音楽の基礎知識や技能を継続的に習得することが必要不可欠である。

音程を感じながら身体を動かし歌唱する活動や、曲想やリズムを感じる音楽表現活動を乳幼児期から継続的に実践することは、小学校教育音楽科で学ぶ思考力・判断力・表現力等や、知識、技能に関する資質・能力の基礎を遊びのなかで養うことができるといえよう。そして保育者養成での音楽表現指導では、音楽の基礎知識・技術の継続的な学習にとどまらず、音楽表現技術と保育に関する知識・技術、子どもの日常の遊びとを関連付けた『音遊び』の検討と実践を行い、子どもと音楽表現活動との関わりについてさらに深く学ぶ必要がある。今後も乳幼児の音楽表現活動の実践を継続し、子どもの主体性を育む音楽表現活動の指導法について、さらに検討していきたい。

## 謝 辞

本研究にあたり、音楽表現活動の実践にご協力くださった沼田郁子氏、子どもと保護者の皆様に心より御礼申し上げます。

## 脚 注

- <sup>1)</sup> 『10の姿』は、以下のとおりである。「1. 健康な心と体」「2. 自立心」「3. 共同性」「4. 道徳性・規範意識の芽生え」「5. 社会生活との関わり」「6. 思考力の芽生え」「7. 自然とのかかわり」「8. 数量・図形、文字等への関心・感覚」「9. 言葉による伝え合い」「10. 豊かな感性と表現」
- <sup>2)</sup> 知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力の基礎」「学びに向かう力、人間性等」
- <sup>3)</sup> 沼田郁子氏が乳幼児からを対象に運営する音楽教室。リトミック教室では、乳幼児を対象に身体全身を使った音楽表現活動を通して、子どもの感性や音を聴く力の育成、ピアノ演奏導入のための音楽基礎知識習得を目的に実践を行っている。
- <sup>4)</sup> 沼田郁子氏 (リトミック・ピアノ講師) 全日本リトミック協会会員 全日本ピアノ指導者協会会員 ギロック協会会員
- <sup>5)</sup> 活動1、活動2、活動3、活動4と表記する。

## 参考文献

- 文部科学省2018 『幼稚園教育要領解説』 東京：フレーベル館  
内閣府・文部科学省・厚生労働省2018 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』 東京：フレーベル館  
厚生労働省2018 『保育所保育指針解説』 東京：フレーベル館  
無藤隆編著 2018 『育てたい子どもの姿とこれからの保育—平成30年度施行 幼稚園・保育所・認定こども園 新要領・新指針対応—』 東京：株式会社ぎょうせい  
エリザベス・バンドュレスバー著 石丸由理訳 2018 『ダルクローズのリトミック リトミック教育のための原理と指針』 東京：株式会社ドレミ楽譜出版社